

『筑紫日記』翻刻及び語注（下）

頭・中條士毅らと八日間の旅である。これについては、冠纓神社発行の『檣屋』に全文が紹介されている。

五、下巻の存在について

長崎往復の旅は、四十五日を要している。その内、『筑紫日記』（上巻）に記されているのは、往路の二十数日間であり、復路については記されていない。当然、下巻があるわけであるが、まだ管見に入っていない。ただ、『高洲歌集』に復路の歌が載っているため、おもだった地名を紹介しておく。

四、（承前）菊池高洲と旅

高洲は、旅をよくしている。それにとまって和歌や文章を残している。それらを若干紹介してみたい。和歌については、多和文庫蔵『高洲歌集』（香川県高等学校国語教育研究会『国語』50・51号に翻刻）の中に載っている。次のようなものである。

1、京都・大阪への旅（若い時の京都への遊学）

2、徳島への旅

3、「富士百首」の旅（実際に旅をしたかどうかは不明）

4、愛媛への旅（享和二（一八一八）年、五十五歳の時、友人の渡辺茂雅との旅）

次に、徳島の祖谷への旅であるが、これは寛政五（一七九三）年、四十六歳の時のものである。僧西湖を先導として、友人の田村惟

次におもだった所で詠んだ和歌のいくつかと、その参考にした古歌をあげておく。（番号は『高洲歌集』及び『万葉集』のもの）

1、長崎を出発

2、（佐賀県唐津付近）鳴駒山・松浦川・玉島川・虹の松原

3、（福岡市）姪の浜

4、（山口県）新泊・（光市付近）室積の浦

5、（広島県）錦帯橋・厳島・鞆

6、（香川県）象頭山・綾川・滝宮

7、自宅に帰着

、松浦川

202 おきつ風ふく度毎に峰の松がえ 今もかも領巾ふらすか
とあやまたれぬる

『万葉集』巻五の大神佐提比古と松浦佐用姫との別れの歌を本
歌としている。

847 海原の沖行く舟を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫
、玉島川

203 玉島の川は渡れと若鮎つりし 七のをとめが行方しらず
も

『日本書紀』（神功皇后・摂政前紀）に皇后が鮎を釣って新羅
遠征の成否を占ったことが見える。又、『万葉集』の次の歌にも
拠っている

856 松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる児らが家道知らずも
、深江の鎮懐石

深江の子負はらに むかし息長帯姫の命、から国うち給
ひし時、御腰にはさみ給へる石二ありしよし、『万葉
集』『筑前風土記』にくはしくしるせり。さるを、ぬす
人近ごろいかなるしれものか、ぬすみとりしよし、いふ
をきぎて

206 白波のよする浜辺は神さぶる 奇御玉さへさすらへるか

も

これは、『筑前風土記』の中にある、神功皇后が陣痛の時、腰
に玉を二つ付けた古事に拠っている。又、『万葉集』巻五の山上
憶良の次の歌にも拠っている。

814 天地の共に久しく言ひ継げと此奇魂敷かしけらしも
、姪の浜

姪のはま凡三里ばかり、松はみどりに砂白く青海ばら
見わたせる。景色いとよし。

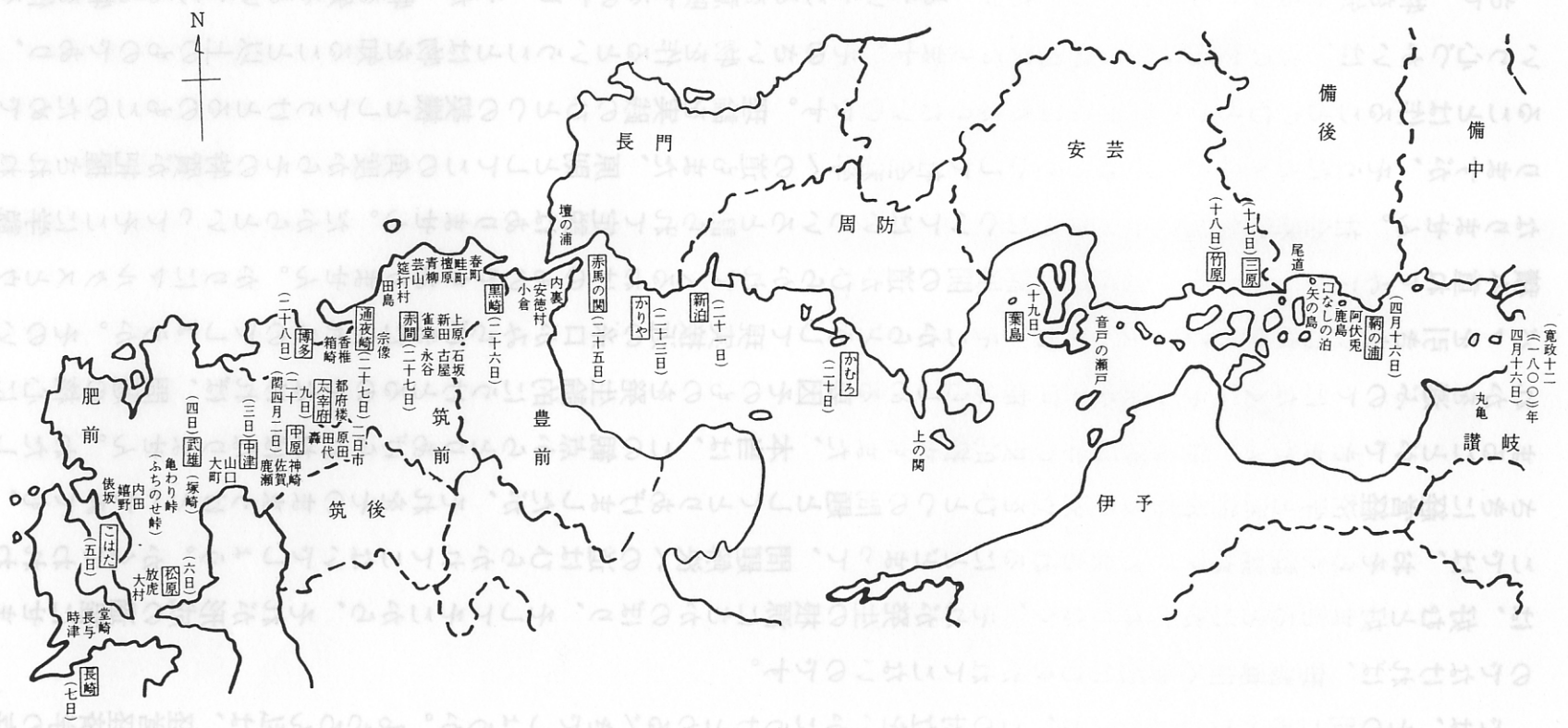
208 塩土の翁をしへしわたつみの うまし小浜はこゝにやあ
らぬ

『日本書紀』の中に、塩土老翁が登場し、瓊瓊杵尊や山幸彦や
神武天皇に良い土地を教えている古事に拠っている。

「付記」本稿をなすにあたって、佐賀県武雄市立図書館及び北原
峰樹氏より多大の教示を頂いた。深謝してお礼申し上げます。

六、旅程図

() は宿泊地を示す



筑紫日記(続)

二日朝、太宰府をたつ。浦の坊、人を附て近道のしるべせしむ。山間を行こと一里ばかりにして、某方角を教て帰る。

又、行こと二里余にして田代に至。「此道は甚あしく本道を行べし。本道は宰府より二日市、其間半里。二日市より原田に至。其間壹里三十二丁。原田より田代迄壹里」田代は肥前国也。

「松平肥前守御領、三十五万七千石。御城は佐賀」田代より轟迄二里。「日本紀」第九に「息長帯姫命「神功皇后」定神田而佃之時。引灘河(1)水ヲ欲潤神田、掘溝。及于迹驚(2)岡。

大磐塞(イ)之。不得穿溝。皇后召武内宿祢。捧劍鏡令禱。祈神祇。而求通溝。則當時雷電霹靂(カ)蹶。裂其磐令通水。故時人号其溝。曰裂田溝(3)也」とあり。轟は迹驚

也。裂田溝などたづねまほしかりけれど、心せくことのありてはたさず。今もありやなしや。土人に問べきを心つかずてくやし。「風土記」もたざれば、たづねべきよすがもなし。筑前の貝原

のあらはせる「名寄」の有。肥前にもさるものありやとたづぬれど教人なし。比あたり名書などなく、しる人もなし。「肥前風土記」やうのものをたずぬれど、此あたり書地もなく、教人も

なし。後に遊ばん人あらかじめ京師肆などにもとめてもたるべし」轟に関あり。往來をけみす。予輩往來手形を出しければ、子細なしといひて、通しぬ。「此度長崎往來、凡、三関所あり。是と俵坂と(空白)也。手形なくても通る人もあれど、あやうし必もつべし」。轟より中原

迄行く。凡六里半ばかりにて宿す。ここにて旅籠(ハ)の代にかへ金子一斤を出しければ、其余りを国

(石)札といふものにてはらふ。国(石)札とは米札也。当時、米壹升は錢四十文にあたる。三升札、五升札、壹斗札有。三斗札、五斗札あり。「一石札はありやなしやしらず。」皆其割合に

てつかふ。「壹升は錢四十文にあたる。是は時の米価相場によれるか。」

〔語注〕

閏四月二日

(1) 原河(1)水ヲ欲潤神田、掘溝。及于迹驚(2)岡。

(2) 高谷市西隣の田原町の山。

(1) 今の那珂川。

(2) 福岡県那珂川町にある地名。

(3) さくたのうなで。溝の名。

(4) 寶篋四天王の書留の

(2) 式に對する。

(4) 調べ改める。

三日朝六つ時、中原をたち行こと二里計にして神崎に至る。神崎より二里にして佐賀に至る。佐賀は松平肥前侯御城下也。「三十五万七千石」入口に橋あり。橋をこゆれば門あり、門の内に番所あり。「高松常盤橋の辺と同じ」番所をゆけば市井也。市井のさまにぎはしからず。わら屋ぶきなるも多し。御城は、長崎道中よりはみえず。天主台はむかし焼失せし。町の長さ、凡一里ばかり「中原より佐賀の入口迄は二り。さしたる風景なし。出口までは三里也」休むべき処もなく、くたたびれたり。(此日、茶店なくしてやすらふべき処なくいとくたたびれたり)「饅飩屋へよりてうどんくふにつけてやすむべきことか。長崎道中の市井はそほろなれど本町はよろしきにや。高松の田町・新町、丸亀町などはよろしくて、東はま、東はま等は、さもなきがごとくなるが、一概にはさだめがたし」

又、行こと一里にして鹿瀬かせに至る。又、一里にして牛津に至り宿す。佐賀のこなた出口より南の方、十里計に島ばらのうんぜん山(温泉・雲仙)みゆ。先年うんぜん山やけて、半腹より上打きれて飛たりといふなる山もみゆ。「其山に厭れたる家・井、船・家・船なることをしらず。且、津なみうち上て溺死するもの数しれず。島原の君も舟にてのがれ給ひしに、かの山におされて死給へるよし。(其翌日に御病と申出ありけれど、実は)前代未聞の大変也。寛済がつれたる甚八といふもの、其後船にて島原へゆきしに、山の上に帆ばしら突出たるを見たりとなん。うんぜん山のさまこ、にたとへいはく、屋島山のごとく嶺平らかに落たる山はむつめ山のごとし。さて、うんぜん山、今も猶、鳴動し其土人安き心もなし。されど其あたり、又、もとのごとく家居などしつらひをる人の、故土をわすれがたくおもひなづめるこれにてしりぬ。其大変の事は、別記に書し置たれば、こ、にははぶく」とくあやしきことなめりとおもふ。ゆかまはし。

閏四月三日

(5) みすばらしい。

(6) 寛政四(一七九二)年の雲仙の

大噴火をさす。

(7) 高松市西部の円錐形の山。

(8) 思いをよせる。

千はやぶる神よもきかず山かねの落て一の山となるとは

四日朝、牛津をたち一里半にして山口に至。山口より一里半にして、をだの大町に至り、大町より(空白)にして竹尾(塚崎)に至り、馬場常右衛門といふものの宅にやどる。「竹尾亦名塚崎、塚崎今は竹尾(雄)ともいふ」塚崎に温泉あり。凡五六区。御前湯「佐賀侯の浴し給ふ所也。」十文湯・侍湯・五文湯・三文湯・女湯・馬湯等の別あり。其湯大底清しく熱し。但州城崎一二の湯に、たり。佐賀の大臣鍋島十左衛門(壱万石)の預りにて湯の側に一館あり。侯の長崎往來の時、御本陣に備るとぞ「此説いかゞ」。 (其湯の側に清水あり。細々と流てたゆるることなし。冷然いふ計なし。下はいはゆる神域也)。

五日雨ふる。夜明てみれば、家のうしろに(蓬萊山といふ山あり)いとあやしくけはしき山あり。わが国の八くり山にいとよく似たりければ

故郷に我は帰りぬ妻こもる 八栗の山のちかくみゆれば

いとなつかしくて其山にのほらまくほりければ、あるじしたくす。のほりけはしきこといふ計なし。石星を上ること数百級にして左りに折、右に折て、大巖の下に玉の巖洞有。仏像あり。絶頂にはいたりがたし、さがしきこといふ計なし。此山のめぐりす皆希なりしよし。四つ時、雨ふりしきりければ、とどまりてゆあみす。主人年五十余、よく其あたりの故事をいふ。かの八くり山にたるを蓬萊山といふ。蓬萊山の東南三峯(衣手をかかてさしめしめしけらく、東南に峙たるこのみねは、御船山也。むかし息長帯姫命、新羅をうち給ひて、帰り給ふ。此山のもとにはてしより名くとなり。又、御船此山に化たりともいひ伝ふ。其形舟の艦舳のごとし。其麓、豊浦天皇・住吉大神・息長帯姫命・其外武内宿祢・天皇・武雄心の命を祭る。武雄心の命は、武内宿祢也。此地を武雄といふも此よし也。武雄、又、柄崎ともいふ事は、帯姫命か

(9)山の嶺。

閏四月四日

閏四月五日

(10)枕詞。「や」にかかる。

(11)仲哀天皇。

ねてはらみ給へるが、ここにて御身あつくわづらひ給ふ時、武内宿祢劍の柄もて土をほり給ひしかば、いと清しくほとばしり出。今の温泉の側なる清水是也。又、其東に大の山あり。されば、昔此あたり皆青海ばらなりしか。今は青田となりたれど、此山の区地のかたちはなほ海原のかたみありといへり。誠其あたり皆平らかにて、誠にさもあるべくおもはる。一首をよめり。

龜の上の山に上ればうかべりし、青うなばらのありしあとみゆ
逆旅に帰れば、雨ふりしきる。よて其日いとうかりて、温泉にゆあみす。)

相並て尖然たるを三ふね山といふ。其下に武雄社あり。武雄のこと其神主『大監物伴信門』が記ありとて、とり出みす。其詞「武雄社、旧在リ杵島郡武雄村御船山之南嶽。鎮坐年久不記何ノ時トイフコトウカベリシ也。及レテ聖武皇帝天平七年ニ有リテ神ノ託スルコトトイフ者ニ曰ハク『吾是

武内大臣也。在昔息長皇后親征新羅、大服異域而所御三船止メ于襲国、化為喬嶽。吾嘗テ陪乘之ニ在リ船舳ニ。而シテ舟艫則住吉神所指揮スル也。故雖モ在リト艫嶽ニ不肯自ラ安シスルヲ、常ニ遊ブ船舳ニ。幸ニ就テ其ノ地ニ祀ラバ、我則テ永ク為ス異賊順蠻之冥鎮中区

寧靖之福基ト也。』行頼状告干宰府ニ、府奏ス之朝。天皇乃チ下シ詔ヲ改テ造シ神ノ殿ヲ

移シ諸舳岳ニ、尚援イテ豊浦天皇・住吉皇后・菅田別命・武雄心命ニ、奉リ斎ハヒ同殿ニ、称シ武雄五社明神ト、以為ス本宮ト。特ニ底筒男・中筒男・表筒男三神ヲ於艫岳ニ、為ス之上宮ト。

復享テ平郡木克宿祢於舳岳之北峽ニ、為ス之ガ下宮ト。而シテ三舎全備ハル矣。勅シテ寄セテ武雄村ニ以供シ桑盛ニ、使ム行頼ヲ掌テ祭祀ヲ於テ是懸ケ一陳シテ猪兔ヲ、今猶ホ然ル。犠牲無ク孔嘉、

張リ鴟鵂射礼隆奥「今ニ当リ有リ歩射騎射等」子孫綿々ト嗣ギテ補ヒテ本嗣云々。不シテ称武内而祢スル武雄者及ア其ノ所尊也。山ヲ称スル御船者以テ其ノ所ヲ御船也。後称スル唐船ト

者、誤也。御船之為ル山、截然トシテ雙ビ峙ノ恰モ如シ舳艫之相依ルガ。嘗テケル纜之岩在リ古江山

(12) 先がとがつている。

(13) (一六三八〜一七二二)。武雄神社の神官。

○『大監物伴信門が記』は武雄市立図書館蔵の『武雄本紀』によつて訓点を補つたところがある。

(14) そこつつを。なかつつを。うはつつを。住吉神社の祭神。

中ニ。密一通ス之、以テ此地昔滄海也。稱柄崎者、神功皇后有リ身所悩ム。大臣劍柄鑿ノ土ヲ、温泉隨ヒテ手ニ送リ出。后浴シ之得。忽癒。故名ヲケテ曰フ柄崎ト、今作ルハ塚崎ニ訛也。「按スルニ『日本紀』ヲ劍柄をツルギノタナカシトヨメリ。ツカノ訓イカバ」温泉旁ニ有リ神功水極メテ清冷ナリ。乃皇后所自掬フ也。南ニ去ルコト船岳ヲ三許里ニテ而有リ嬉整村。玉垂命為ニ創土ノ自ラ求メテ温泉ヲ得ル之ヲ喜ビ曰ヒ嬉哉ト因リテ名有リ。温泉之右ニ有リ千珠滿珠。蓋シ置ク潮乾珠・潮滿珠處也。其ノ他若キ弓田宮水ノ亦其ノ送ル事也。如何ノ專ラ守リテ国史之闕漏ヲ而弄ハシ蹤跡之顕明ヲ耶。而ルニ今之本宮非ス復タ旧地ニ。後藤ノ祖先藤原章明始テ知レル本懸ヲ之時、暫ク館ス塚崎庄米守名温泉里ニ。毎ニ見ル此ノ山之靈秀ナルヲ、心ニ願フコト尚シ。一旦誨ヘ神教ヲ、辱ク承ケテ勅裁一城シ之ニ為ス元拠ト也。於テ是ニト地ヲ舣岳東麓ニ、公ニ課シ郡中ヲ、新ニ築キテ小山ヲ而宮ミ神殿ヲ規模悉ク依ル舊ニ。又、構ヘテ宮壁ヲ、以テ別壘ヲ若ク西山・富丘・磐井・猪隈ノ諸岩ノ則チ置キテ其ノ氏族ヲ、而為ス藩籬ト也。所謂応安元年之冬ヨリ至リテ二年春ニ少卿冬資陣シ干狩里ニ移シ軍ヲ柏岳ニ襲フ武雄山之館兵ヲ云々。四月今川貞世探一題ニ鎮西ニ入リ潮見壘ニ囲ム塚崎城ヲ云々」

後の史に後藤山ともいふ。塚崎ノ古城在リ舣岳ノ北面ニ。後藤氏英世之城壘石歴々然たり。武雄古城塚崎之子城也。別所谷出ス旗竿ヲ名物也。古江野、槃船岩、弓田原宮水「神功と武内膳舟上徹楯盤盆化シテ為ニ扁磐ト泉沸其□以形似テ宮ニ名ゾク」小竹川「索船岳之北麓者也。今謂フ之ヲ西田川ト藤原貴明朝臣のうたに「たけを山みふねのたけのふもとはは流たえせぬ浪のさゝ川」温泉館「在リ塚崎後山下ニ。塚崎祖君作リテ而為ス齋沐之處ト。古温浴スル者ハ多シ。近世如明瑠木庵清樵心越亦詠帰之尤極美咲」裳卷之江「在リ花崎野ニ、号ス牛飼ト者、昔時汲、新潮ヲ於茲ニ以酒ヲ新庭ニ云」

○鷺田の森¹⁵、○七樹の柵¹⁶、○神遊の松¹⁷、右は其のあらましをしるす。後に遊ばん人つまびらかにし給へ。「むかし、貝原篤信之時」

五日猶雨ふる。(猶雨ふりけれど) 朝にたけをたちて行こと半里ばかり、大なる山あり。亀わり(ふちのせ)峠といふ。(かれ木峠とも、ふちのせ峠ともいふ) 凡、肥前の地是迄は皆平地也(たひらかなりければ)。是より先は山多しと也。行なづみて亀わり(ふちのせ)の山の山をさかしみこえ行ば、足はたぎし¹⁸の三重¹⁹ぐり²⁰ならず。(三里にして) 内田橙野などいふ処を過てうれし野に至る。(此はむかし玉垂の命、わくらばに²¹此温泉をまぎ²²え給ひてあなうれしとのりたまひしより地の名におひしと也。温泉の右千珠満珠といふ処あり。むかし海のみつ玉潮みつ玉おかし、所也とぞ。玉垂の命神にはあらず。千珠満珠の故事長門の例あり。) 「つかさきより内田へ一り、内田より嬉野へ三り半」嬉野にも温泉あり「佐賀臣蓮池甲斐領」其故実(事)は前にみゆ。市井あり。嬉野より(一里半にして) 俵坂に至る。佐賀領・大村領之境にて関所あり。(其あたりよき茶出る。其処賤がやめといへどわが国の富める人よりよき茶を飲むなり。是は此ところ茶のよろしきか、水のよろしき故か。) 大村領大村信濃守御居也。「肥前大村に城あり。御封地八万五千石なれど内、捨地は凡十石余もあるよし」此前後あやしく苦しき山多し。俵坂より半里余り道の辺に大なる楠あり。凡十五、六圃ばかり、めづらし。楠より一里弱にして彼杵²³に至る。「彼をそのとよむ、古言に似たり」市井あり。よき家多し。「そのきより西南七里の海を舟にて渡り、時津につけば長崎へいと近し」又、行こと一りそれより海山を左りにして海を右にして辺を行こと半里ばかりにして、こはたといふ所にやどる。つか崎より凡六里半也。

六日、こはたをたちて行こと□里計にして放虎²⁴といふ所を過。松のさま(よの常ならず)あり。皆うんぜん山の麓の松をうつしうゑしとぞ。又、桜を左に並うゑたり。数かぞふれば百五

(15) 白鷺が飛び立った場所から温泉

を発見した伝説がある。

(16) 「白本の塞」²⁵のことで、山城のこと。

(17) 山城と温泉地区の間にあった松。

閏四月五日

(18) 船のかじ。

(19) みえまがり三重にまがる。

(20) 偶然に。

(21) 捜し求める。

閏四月六日

十五本あり。右に紙漣の家あまたあり。(其ひとなどみゆ) 其家に鶯(うちしきり)なく。いとめでて、又、いと大なる松がえの四方に打おほひて、蓋のごとくなり。藤の棚もあり。花の時にくれたるをかこちて、

かからんとかねてしりせば花ちらす あらしの風にまゐはせましを
そこに一館あり。大村侯の鉄砲頭某すめりとなん。(日くれければ逆旅にやどる) 又、行こと暫くして、松ばらといふ処あり、やどる。つかさきよりここ迄、凡九里也。そのぎ辺より長崎迄は五十丁一里とぞ。

七日松原をたちて二里、大村に至る。信濃侯御城下也。城は左にあり。市井海浜にそへり。町に入りて三四丁。「城は平城なり。少し小高き処あれども平城なり。松原の内により。天守かくなし。城のこなたに五教館といふ学校あり。祭酒^②むかしは本正蔵といふもの、今は山口貞浦いづれも祿百石也とぞ。大村侯は、伊与守純友の苗裔^③にて、御領高二万七千石なれど五島平戸あたりも御もち候内、捨地は、凡拾万石余ありとぞ。御城は時津につくられし。時津は、長与より一里ほど也。されど当君遊獵乱舞など好給もて遊び給ふと」。海浜にて舟をやとひ長与といふ所につく。其間、凡五里、此日天晴、には平らかにして風景よし。二島・三島・白島・杵島などいふ島ありければ

ふた島や三島を過て杵島を、ふりさけみつつ白島につく 三島二十一日より五日中皆まて
其余、うかひ島「近ころ大村鹿を放ち給ふよし。小島也」うけ島など合て、九十九島ありといふ。「島の名たがひあるべし」三里にして、堂崎に至る。岸の巖、屏風のごとく、怪獣のごとく、さまざまのかたち数ふべからず。

四つ半時、長与につく。(長与より長崎まで凡三里也) 長与に漁獵の家、并に酒店など二十

②恨みなげく

閏四月七日

③学校の長官。

④末孫。

⑤捕手。

⑥数日つづき。

⑦村長。

⑧世也。

余家あり。そこにて行厨²⁵などくらひ暫く休てたち出、十余丁ばかり行しに、老若男女打こぞりて、里正²⁶と覺しき家さして行。いかなることやと、へば、けふは絵ふみに侍ると答ふ。ゑふみとは切支丹宗門のあらため(しらべ)也。鳥原陣(切支丹がり)おこりしより、天の下いづくも御あらため厳かなれど、西国は、其元なる故一入おごそかにして、かの宗尊へる天主とかいふものをほりつけたる銅の磔を人々にふまする也。大抵、三月二十一日より五月中旬まで九州おしなべてかく(如此)すと也。さて、又、この地の人、他国遺留²⁷五年を限る。六年に及てかへれば、人牢せしむること一年にしてゆるす。是は初て生る例になすと也。是を過れば死刑に行ふ。「近ごろ、肥前人福井又助といふ儒者、京都に遺留(たるとか)して、其限におくれければ、国の守よりうて²⁸の(とり捕の)人つかはす。又助さる公卿の家にかくれけるが、終に捕れて死刑につけりといふ。」鳥原・長崎・五島・平戸も亦同じといへり。

川にそひ山に上り坂を下り、かにかく三里ばかりにして長崎に至る。(長崎は懸隔の地にて、西海の大都會也。西と西北に大洋あり。唐はもとより阿蘭陀じゃがたら²⁹のもろくの蛮国諸国の船の来る所也)新町(といふ町に)小比賀新(慎)八といふ人の(あり)もとに至る。慎八は、もとはわが国高松の人(なりしが)にて、(二十年計前)わかき時、長崎に至り、市井の吏たりしが、今は郷方御奉行高木作右衛門殿に広郷方元締といふ職をつとむ。ひととなり篤実にして、才あれば郷町ともに帰服す。(わが友梶原平十郎と親しければ、平十郎手簡をもちて行もて)をりふし公用にて留主なりしが、人してわが輩の来れるを告しかば、しばらくありて帰りぬ。よが旧相識あり、しらぬ人なれど、そのいつくしき友なるわが国の梶原平十郎が書翰を出しければ、やがてたち出てあいさつす(ものがたりす)。初て相みつれど、同国の故にや、いとねもころにもてなざる。長崎は県官の地³⁰にて、外国の船つき、諸国の人々多く集る

(25) 弁当。

(26) 村長。

(27) 残りとどまる。

(28) 討手。

(29) ジャカルタ。

(30) 天領。

なれど、旅宿のやどは其家にやどれといひしかど、公事繁き人をわづらはさんことのいとをし
くて、さるべきかたへしるべし給はれと、あながちにこひければ、故高善町森善右衛門といふ
もの、かたへ其人そへて送りくる。「長崎は其誰かゆかりの人にたよらざればやどす家なし。
又、ゆかりある人よりやがて其町の吏につくること也」善右衛門、年三十ばかり、正直にして
才ある人となん。其家わが国の郡宿のごときにや。長崎の南五六里、乃毛といふ処のむらの
(長)吏・百姓等多く来り居れり。

八日、善右衛門、嚮導にて福濟禪寺に参る(つ)。 (唐人寺凡三あり。福濟寺・聖福寺・
崇福寺也)唐人建立の寺にて、わが国の寺とは、其制、あだし寺とはつくりさまいと異な
り。其寺山の半腹に倚れり。石階四五十級を上げば、高さ式丈余、長さ五六間ばかりの石垣あ
り。右に折、又、左に折て上げれば門あり。其さま城の虎口馬出しのごとし。門に横額あり。
(横に)題に曰、「福濟禪寺」(と題す。側かたはらに)「黄蘗の木庵(木庵は唐人也)の
書」とあり。(神妙にわたり、山城の黄蘗の寺の組様たり。能書の生あり。)又、上げば圭
門あり。〇のごとし(かたちはいで口といふ)圭門に入ば、真向に小堂あり。「大願主」と書
たる額をか、ぐ、左に折て行こと五十歩ばかりいとたかき(ながき)石垣あり。石橋にそひ、
石垣直て右に折、石階数級を(上げば)大なる門あり。門の左右の柱の根に、南蛮の石あり。
(鋼石を方台にのす。皆方台石也。形固くし、方石の台、円石あり。わたり二尺ばかり鏡のご
とし。方石の台にのす。〇〇かくのごとし)形鏡に似たり。右は龍・獅子・牡丹・竹を彫れり。左
は、猿猴・鹿をほれり。其石理密緻にして刻画細精工妙いふばかりなし。(南蛮の物といふ)
石階の下門の左右にあたりて、各三の株あり。(かたち川の字のごとし)いかなる為ぞと、へ
ば、唐人来れる時しるしの旗たつる株也とぞ。門に額あり。横に「山海大観」の四文字を書

閏四月八日

(31) 先導。

(32) 昭和二十年の戦災で焼失。現在、唐門のみ残る。

(33) 延宝五(一六七七)年鉄心禪師が

開いた。

(34) 黄蘗宗の寺。寛永六(一六二

九)年王氏開祖。

(35) 他の寺。

(36) 隠元により寛文元(一六六一)

年宇治に開基された。

(37) 門の脇の小さい戸。

し、左右小書に、右脇に「明曆丁酉之秋温陵歩雲葵簡為」、左脇に「鼇江林于埃」とあり。門に入れば左に鐘（鐘）樓あり。右に布袋堂のあり。「一小堂あり。木像を置。堂の別廟門の如にして中央に布袋あり。左右に掖門³⁸有。布袋の像、わが国のごとし。是は唐人の安置したるか、又、わがくにの人の作れるか、布袋の出処未知也」「万行莊嚴」の四大字を真書せる額をかかぐ。布袋の□に門有。掖門をいれればいと大なる堂あり。奥を三区にわかち中央には観音像あり。（普天慈母は、琉球国某氏の裔なりしが、皆海にてやぶれければ、いたくかこちて、身まかり遂に風雲の神になれるごとし）左には関帝³⁹の像あり。右には舟玉神の像あり。いづれも木像にて彩を施す。関帝は『三国志』にはゆる蜀侯関羽字雲長也。死して神となりて別氏（祥賢）をすくふ。から国の人は是を仰ぐことわがくにの金毘羅の神のごとしとぞ。「当時もろこしにて天が下こぞりていつく神は、孔子と関帝也。孔子はわがくにの伊勢の大み神のごとくなりとぞ。其事『宝里志』にくはしくみえたり。又、張天子⁴⁰といふもの有。漢の張良の子孫にて、天子の祈禱をつかさどる位格甚尊し。日本の聖護院の宮のやうなり。」関帝は其さま床に長跏⁴¹す。身長凡一丈ばかり。（八束⁴²の）鬚髯⁴³胸前にたる。（『琉球島伝録』にみえたり）装束はもろこしの時服にて、優月力はなし。さて、聖母舟玉神は、妙年美女のさまにて、床に踞したるかたち凡三尺ばかり、首に兔旒⁴⁴をいたゞく。「旒玉⁴⁵は、前にたる。左右にはたれず。長さ四・五寸ばかり。終のとどめの玉は、△△のごときかたち也」（美しといふべし）身には、萌黄の文ありて、衣をきて裳長くたる。其制は、吾方の時留利のごとく、其神のことはくはしく『琉球島伝録』にみゆ。船中もはらいのる神也。（さて此寺）凡此寺堂皆床なし。（凡此寺春徳院は床あり。神仏の所瓦をして床とす）敷尾をしく、黄葉のこ有そふべからず。（山城の黄葉のごとし。聯頼殿しられずあり）

38 正門の左右の小門。

39 関羽。蜀の劉備に仕える。国民的英雄とあがめられる。一六一

40 張陵。道教の祖師となる。

41 膝をたててすわる。

42 八握の長さ。長いこと。

43 しゅぜん。あごひげとほおひげ。

44 べんりふ。冠の端の玉のかざり。

45 冠の前後の玉のかざり。

觀こと終て、山を下り市井に出、右に行こと久しくして、聖福寺に至る。又、唐人寺也。

(凡長崎唐人寺三つ。是と福濟寺と崇福寺と也) 其制大かた福濟寺に同じければはぶく。「善右衛門云」むかし唐人船玉の神に「普天慈母」と書たる額奉りけるに、其額のふちに麝香⁴⁶を仕迪て折せし故、今は其御あらためもきびしきよし」其庭絶景にて見物に行人多し。長崎の海づら市井一瞬にみわたさる。「長崎はわが国の高松より少しひろき所也。景氣いとよし。外国并に諸国の舟人きたりて、氣活多く有。其故にや市井の家もよくにぎはしく、其上、公武の御役所・西国大名の御やしき・唐人やしき・阿蘭陀やしきなどあればなるべし」

其庭のあなたに唐人やしきあり。其間ほりきりして土塀^{ついで}を高く築あげたり。(されど、なほ其ひまより凡のさま見ゆ) 其やしき三区にわかつ。一区毎に長さ百余間「其内を幾間にも分つ」(引つゞきて) 欄干あり。欄干の前に高さ七八尺なる涼台を作り、上をおほへる。此方の紫のだんじり⁴⁴の如くしつらひたるもあり。是は、唐人のをりふし遊びの為也とぞ。「善衛門云」聖福寺と唐人屋敷のさかひなるほりをこえ、垣をこえて、唐人と直に売買するものをりくあり。又、時には地の底をほりて、唐人の居間に通じたるものも有。是を『ははん⁴⁵』といふ。其外私に唐物を売買するをも『バハン』といふ。垣をこゆるたぐひあらはるれば、即ち死刑に行ふ。かゝることなれど、利欲に眼くらみて、犯せるものをりくあり」

それより、又、市井に出、波戸場といふ所、舟つきに至る。舟より上る処也。そこに重さ六十貫余の鉄丸あり。是は、日本島銃^{てつぽう}の妙。かゝる玉をも放つといふことを外国の人をどす也とぞ。「されど唐人は、其虚誕^{うそ}なりといひて笑ふと也。近年、萩野某火術の妙也。此長鉄丸をも用べしといへりとぞ」(或云、昔、島原戦時、大筒をこしらへ此鉄丸をこみ、城を一時にくだかんとはかりけるを、賊、是をさとり、黄汁をそぎしかば、ことならずしてもち帰りこゝに

(46) じゃかふ。麝香鹿より得られた香料。

(47) 太鼓の台。

(48) 八幡・番舶・奪販。和寇・海賊行為・或は国禁を犯して海外に渡り貿易をすることなどをさす。

(49) いつわり。

置るといへり。外国の人是をもて、おのれらを威す為也とおもひあやまり、虚誕なりといひてわらふ也。かゝる鉄丸鳥銃に入らるゝものかは) 日も暮れければ、逆旅に帰りぬ。

其夜、小比賀氏によばれて行。筑前侯より給はれる忍冬酒、越前侯より給はれる酒、又、豚のさしみ・唐くはしなど、めづらしきくさくさく出してもてなざる。茶香また人馬平安散「茶香はよく酩酊をさます。平安散は人馬のきつけあつけなどによし」そくばくくれたる。予とひけらくむかしは、唐船唐津、又は、博多、又は、泉州堺津へつきしより、古史・古書にみえたり。長崎へつくことは、いつのころよりにやととひしかば、大抵(足利の末よりはじまり)慶長のころよりのよし答ふ。慎八云「先是二年、唐船二艘、風波(悪風)にあひて、長崎の沖にて覆り、船人皆死す。それより後(又、海中に盗賊にあふもあり) (近年、外国の舟来泊まれなるよし承に、いかなることにやといひければ)唐船入津甚まれにして、唐物すべて高値也。長崎は、唐物をもて渡(よのわたひ)世する処なるを、かゝる故、いとさはがしく危急存亡の秋也とて、眉をひそめざる者なし」とぞいふ。(日本へ来る船、凡十二家有。鏡字丈といふもの尤富となん。一家之富当十一家となん)又云、「長崎へ来る舟は、もろこしのいづこより来れるととひしかば、乍浦といふ所より来る。乍ノ浦は唐の地也。其舟船主といふあり、船君也。船君の副の案針は、船つかふ長也。案針財傍といふあり。船君の副也。「二番之頭也」案針は船頭也。石社は鹿兎也。マドロスは炊の如し。黒坊は小遣也」といへり。人馬平安散の方、辰砂「二両」・硫黄「二両」・白礬「五錢」・麝香「二錢」・冰片「二錢」・火硝「二両銅勺内煉慘」・猪牙皂角「一錢」・凡七品「冰片は龍腦也。猪牙皂角は肥皂菴也。銅勺内煉慘の五字脱誤あるか、心えがたし」(かくてくさくさ)のものがたりし、茶香・人馬平安散などそくばくおくらる。いづれももろこしのくすりにて、茶香は酒の酔さまし、平安散は人馬のいきしにたるなどに用て妙也。『新安手簡』を

50) さほ。上海南部の港。阿片戦争
までは清国の重要な港。
51) 船の航海士。

52) 香木。

53) 書簡集。新井白石他著。天明年

らんだのこと此中に有べし。夜ふけて逆旅へかへりやどる。

九日小舟にのりて海めぐりす。これより前五六日、阿蘭陀舟入津す。其舟日本船よりは底ふかく、はばひろし、故に二三百石（あまりのすべき）ばかりの船とみゆれど、五百石ばかりにあたると也。（蘭船の大なるものは中を凹にして、瀬其上をばはせ、唐より数日往来すと也。これ舟深き故也。）舟のさま人のさま常にみたる絵のごとし。ただ黒坊のみいさ、か異也。黒坊の顔常人よりは少し黒けれど墨漆のごとくにあらず。身の長は、いかにも短くして、身の軽きことは鳥のごとし。阿蘭陀人にはあらず。伝の某の国よりやとひ来る也。常は大かた七八月の頃来るを、今はゆくりなく来れりと也。舟はいつもの半也とぞ。（蘭人紫の羽折のごときものをきて、牡丹がけにして引しむる故、足をからめがたし。其足からまざるにはあらず。あたまは悉そりて髪を用ふ）「阿蘭船着岸のこと必らず江戸へまをし。江戸より命ありて舟あがりせしむ。飛脚往来凡二十日計、其間は徒に船中にあり。深き故あるなるべけれど、非所以懐遠人也などつぶやくものあり。長崎御奉行便宜もて事に従ふべき御掟にあらまほしなどつぶやくものあり」さて阿蘭陀の出入必、石飛矢⁵⁴をうつ。横さまにうつ穴あり。石飛矢をうつはさしたる用もなし。（ただ勢をとるのみ）昔は其音方二里にひびきしが、今はわづかに長崎にひびくばかり也。玉はなしとぞ。（鉦鹿云「此たび来れる蘭船は、はば式間、長さ八間、四五百石つむべし。ボルネヲといふ処の船也。船頭はステワルといふ国の人にて、日本より東にあたる国の人也」とぞ）（『新安手簡』を見ること終にみえたり）（阿蘭陀の礼坐則箕踞⁵⁵す。足をかゝむることし。故に行騰⁵⁶を牡丹がけにす。長崎御奉行に謁する時は、失礼の咎を恐れてか足をのばして、俯伏す。其形「く」の字の如し。久しきことあはず。故に早く退出んせことを願て、更にたのむと也。然るを阿蘭陀は生来足がまず。險重は犬のごとしといふは、付会甚しき也。）

間刊。

閏四月九日

54 予想外に。

55 いしびや。室町時代末に伝来した大砲。

56 ききよ。足なげ出してすわる。

57 むかばき。狩りの時に両足をおおった毛皮。

さて長崎は筑前侯「福岡」、肥前侯「佐賀」かはるく御代番にて、（常に大臣をつかはされ）江戸の御直職の前後かならずみづから御出ある。「常は大臣をつかはされ置る、が、唐の御おさへ、又、辺垂の鎮めなるべし。両侯江戸より御帰の翌日か、又、翌々にはかならず長崎へ発駕あるべし」こと常例也。をりふし肥前侯長崎より御帰り御出帆の日にて御舟の儀いとうつくしく、はるか侯をも拝奉れり。（めうがの紋徽張付たる紅の幕打はへ、様々さはぎて、五十人計まかぢしぬき行）其後に引つづき同じめうがの紋の幕うちたる舟、同じ太鼓打つつ漕ゆく。是は御公子家世某の船也とぞ。いづれも鯨ふねいと多し。たゞ侯のみふねには壇ありて、其壇の上に座し給へるのみ異なり。「或云、凡諸侯の御舟は、かならず一段たかき壇あり。ことなき時は、よろしきやうなれど、難風の時は大なるさはりとなる。さる諸侯壇の故に海に没死し給ふ例もありと也。又、船の上は船頭・鹿見いと重き職なるに、其吟味おろかにして、あやまち給ふ君もかれこれありといへり」と壯観也。

さてこぎゆけば西泊戸町といふ所あり。是（諸船）長崎への入口也。左右に山あり。山に番所あり。其側蔵屋敷あり。其たてかた魚鱗鶴翼の備也とぞ。いづれも公義の御番所にて、筑前・肥前両侯のはるく御衛りなさる、よし。其傍によそひふね十余艘あり。是は両侯より無事の墓あり。又、俊寛寺といふあり。古の罪人の島也」といへり。されど俊寛が「さつまがた沖の小島に我あり」とよめるをみれば、方角たがひたり。猶考べし。）
それよりこぎかへりて梅が崎といふ処につく。唐船のやぶれてのりすてたるあり。三千石ほどつめる船也。日本の船とはいと異也。絵図のごとし。「其舟の事、唐人後に人にいひつぎくし、うり舟になりたれど、買人なく二三年以来かくのごとしと也」梅が崎に肥前屋久右衛

58 辺境。
59 ふなよそほひ。船を整備する。

60 戦鬪の陣形。上から見て凸又は凹の陣形。

門といふものあり。唐の書籍、其外諸他取次売買するとき、て、立よりにて暫くものがたりす。久右衛門云「近ごろもろこしより諸書あまた渡れり」とて其目錄出しみす。開きみれば、欽定四庫⁶⁰珍蔵無板書目『周易口訣義』六卷・『易伝燈』四卷・『鄭敷文書記』一卷・『洪範統』一卷・『春秋釈例』十五卷・『箴膏肓』一卷・『起癆疾』一卷・『春秋長曆』一卷、『攷墨子』一卷・『春秋別典』十五卷・『春秋重鎖題』一卷・『論語定原』二卷・『孟子外書』四卷・『唐史論断』三卷・『三国雜事』二卷・『群賢小集』百十三卷。下略共計二百七十卷三十二套⁶¹とあり。右の書各一部づ、渡りたるを、悉く江戸御文庫に納む。其御文庫に納まらざる前に、長崎学校の学士たち手分して写したるを、今は、又、うつしにうつして肥後の興讓館、長門の明倫館へもつかはしけるよし（此一段は内密也。書なほすべし）。『春秋釈例』の代をとへば、凡式百四五拾目也といふ。『十三經』、『三礼義疏』は、いかほどとへば、『十三經』は金七兩、『三礼義疏』は金七兩式歩也といふ。『十三經』はいかにとへば、七兩式歩也。近年嘉慶板の『十三經』十六套出来、万曆板（銅板）をうつしたるものにていとよくよろしき本なるよし。いまだ日本へはわたらず。「日本の寛政九年にあたりて刻成」となり。予はじめ『三礼義疏』をもたりしが、ゆくりなく人にとられて、夢寝⁶²にみしかば、『義疏』もとめたり。遠函類函凡二十套、代は七八兩也といふ。好ましけれど、金なければ力及ばず。『三礼義疏』肥前屋より元高善町森善兵衛、三枝某、善兵衛方にて、挟箱に入したみ大坂京町堀式丁め小西武兵衛方へとゞけ、武兵衛より引田浦神崎寛濟へ届け、寛濟より高松町引田屋某を送る等」

さて、学校は、向井玄省⁶³といふ人草創し、米十俵に十人扶持給はり祭酒たり。凡異国より來れる書は此学校にて、某の書にてしかく、のよしまをす。そこに聖廟あり。唐船來る毎に、砂糖式百斤を献ずと也。さて長崎の名家をとぶらひければ、むかし元木仁太夫⁶⁴といふ人あり。蘭

60 黄金の寶貝までもふみかきもの
 61 書の人。人神國を御意とす。式
 62 じふふむむ人。書の御意。式
 63 大國の廿文。式

61) 中国の官制の文庫。

62) つつみ。

63) 伊達のさき。分々其御の重
 64) ははは。二二二八二一八〇

64) 向井元升（一六〇九〜一六七

七）儒者・医者。長崎聖廟を建

てる。元木（一六三三〜一六六

六）

学の達人なりし、其子莊左衛門⁶⁵劣たれども、当時蘭学は此人に及ぶものなし。詩文には長崎御用達吉村迂斎⁶⁶。詩には高松南陵、最勝寺国龍「百宗」名あり。音訳者には吉尾幸作⁶⁷「むかし罪ありて蟄居しけるが今は御免也」の外、榊林十兵衛⁶⁸名あり。去々年江戸へ召れ御前にて、阿蘭陀舟の向ふ風を追風にとり為す術を上覧に備しかば御感ありしと也。

十日、小比賀氏われ二人を導て、大沢鉦鹿助五郎⁶⁹といふ人のもとに至る。鉦鹿氏其(四世の)先祖はもろこし鉦鹿郡の太守なりしが、明末の乱をさけ、宗努を率て日本に渡り、長崎に住居す。「朱藤水⁷⁰など大方同時なるべし。むかしわが少年の時、京都に遊びし時(長崎人)鉦鹿民部といふ人(京に来て)沈南頻⁷¹流の画工なるよしさたあり。此助五郎の兄なりとぞ」

そのかみもろこしより送り来れる材木金石をもて家作り、諸色一も唐物ならぬはなかりしを、其後失火にあひて、家宝多く焼うせしよし、今も鍛山并礎石た、み等はみな唐物也とぞ。助五郎年六十ばかり、貞実にて、もろこしの地理事状よく弁へたりとみゆ。かねて小比賀に家宝一見の事たのみ置しかば、其よし通じけるにや、床には呉童子⁷²が画る鉄拐仙人のかけものあり。は、一尺五六寸長さ四尺余、筆力適勁にして、真に逼る。前に青貝の几あり。几上に香壇あり。(細合⁷³作りの台⁷⁴)「駱駝(たくだ)のかたち螺鈿⁷⁵為之」皆唐物にて古色あり。床のこなたに、置床といふものあり。日本の戸棚の如くなるものにて、上下左右黒(漆)塗の板にて、中間を空くし中と上とに物置もの也。長さ六尺、は、三尺ばかり。其上に銅雀台の瓦硯あり。其形日本の袖瓦のごとくにして「中そりて、そりはしのごとし」長さ壹尺八九寸、は、五六寸、硯墨する処は(空白)海は(空白)、如のかたち也。(其色至て洞黒溪のごとし。黒玉のごとくにして、瓦とはみえぬかたち也。)其側古今名家の銘あまたあり。其中に対書の曹孟徳⁷⁶の「四時逝去昼夜云々」の五言古詩を横に書せるもあり「曇花墨あらましかば、悉

(65) 本木良永(一七三五〜一七九

四) オランダ通詞。

(66) 本木庄左衛門(一七六九〜一八

二二) 良永の長男。

(67) (一七四九〜一八〇五) 唐船交

易の責任者。漢詩にも長ずる。

(68) 吉雄耕牛。(一七二四〜一八〇

〇) オランダ通詞。

(69) 榊林重兵衛(一七五〇〜一八〇

二) オランダ通詞。

閏四月十日

(70) おおが。(一七二八〜一八〇

九) 明楽の能手。代々長崎の通

詞。

(71) 明末の朱子学者。亡命して徳川

光圀に仕えた。

(72) しんなんびん。清の画家。濃彩

細密な花鳥画を日本に伝えた。

(73) 唐の人。人物画を得意とした。

(74) 黄金や青貝をすり込んだもの。

く摺てかへらましを、逆旅にわすれ置て、今にくやし」

明ノ劉基〔明太宗の參軍字白雲名將也〕

画軸三軸・大さ各、奥一帖計。竹・松・鶴二をゑがく。

明ノ錢選⁷⁶之画一軸。僧聖漢竹松鶴童子二人牡丹などあり。皆墨絵也。〔此人彩色の画はなし。

蝶もかすかに有〕

同一軸、赤白牡丹燕二三つ有。

同一軸、麻姑仙人⁷⁷（書を荷ひて）黒き虎を率たる図。上に槐の木有。根に蔦かかれり。

（呉川）陳雲博之書一軸。平堤千尺緑楊中、紫鞵金鞍五色懸、雲遂四蹄留不輕、晚路旅泊渡春

風

同書一軸、金殿嘗頭紫閣重

同 柳色湖光水照明、興書倒映緑釵輕、蒼簾高卷尺余事、時聽黄鶴兩三声

枝山⁷⁸之明書一軸。何処雪飄花、飛來隱士家、推窓看月色、時光瘡痕斜

此外かれこれみせられたれど、悉くは書すにいとまあらず。予もとより書画をしらざれば、

其よしあしは弁ふべきにあらねど、書は精神ありて風致あり。画は自然にして真にせまれり。

是迄こゝかしこにてみたる書画、是にてらし合すれば、多くは贗物なるべくおもはる。

観こと終て、予、主人にいひけるは、「諸葛孔明の陣大鼓といふもの其家に、伝へ給ふよ

し、はやくより承はり侍りぬ。踰隴望蜀⁷⁹のこといかなれど、とても御恵に見ることをゆる

し給ひてんや」といへば、主人「そは御耳たがひ也。其大鼓は、わが家にはあらず、川津屋八

兵衛といふものもたりしが、「もとは明の末、此国にわたり其鼓伝也。孔明の苗裔にて、家に

つたへたりしが」三十年前計以前、家まづしく成て、質にせしを、其質屋都すきければ、式拾

(75) 曹操。三国魏の創設者。

(76) 元の画家。人物、花木、山水を得意とした。

(77) 後漢の仙女。指の爪が長い。

(78) 祝允（一四六〇〜一五二六）のこと。明代の書家。

(79) ろうをこへ、しよくをのぞむ。更に欲が深くなること。

四貫目に江戸へ御うり上申せしにより、今は江戸御武庫に納りて、長崎にはなし。其いまだ奉らざりし時、其大鼓はみたり。其大き一罍余、からかねのごとくなるもの也。仕立て皮は用ひず、胴にしつけ鑄たるもの也。一方は空也。「今の唐の大鼓もかくの如し、其声からくいふ。どんくとはにござらず。潮にひたせば少しにござる。されど早くは、此方のごとく両方張る事も有。」大鼓の表に八卦⁸⁰を画す」と也。(当時)もろこしの地理人情などとひければいとつまびらかにこたふ。あはれ此人(八兵衛はもしもともろこしの人にて)と二三日も四五日ものたらばやとおもひけれど、始て相みし人なれば(長居も)いかがあらんとなれば、あつく拝謝しいとま申て立出づ。

小比賀曰「聖福寺の書画一見の事、かねてかの寺へ申しこみ給ふ。参るべきむね申し侍り。是より直に行べし。」とて、行道にて、聖福寺の使僧むかひに来れるにあふ。打つれて寺に入。書院に通れば、和尚出て、あいさつし、くはし・茶など出す。かねて書画多く出して、床なげしなどかけならべたり。先、二間床に、宋の蘇東坡⁸¹の画ける四幅対の竹あり。長さ各六尺計、はゞ二尺ばかり「以画鎖言有。不計裱褙⁸²上下皆同」四季の竹也。春には(空白)あり夏には笋あり、秋は月、冬は雪のさま也。二印あれども、文字弁へがたし。其よしあしは、もとよりわが弁ふべきにあらねど、一葉一節も皆精神こもりて筆先にて、書たりとおほしき処は一もなし。五日に一水、十日に一山といへる、誠にさることこそと、始ておもひあたりぬ。こは江戸召駿に達し、とりよせてみそなはしいとめで給ひて、大切にせよとの命をかゝり、出すにも、納るにもかならず其支流四ヶ寺たちあふ事なるよし、(重きたからにて)いとくめづらしきもの也。

明の祝允明の書。一軸。羨尔飛々得白雲 □地深处壳西頭 生来真是殊凡様 □溪巢高玉折杖「此書古びて所々かすれたり。」

(80) 三種の算木を組み合せて出来る八つの形。

(81) (一〇三六―一〇二) 宋の文人、画家。墨竹をよくする。

(82) 裱装する。

四明呂紀之画。二幅之対。一幅は上に鷹の小鳥を追ふさま、下に高巖あり。一幅は春の黄鳥、雌雄。「小鳥也。皆、白羽白尾、尾の長きは雄、短きは雌也。」鷹に追はれて逃る処、其下、兔草間を走る。「此二幅は一にしてみるやうにゑがけるもの也。」

木溪画。一幅。黒虎、勢ひ猛にして身の毛たつやう也。

雲門書。一幅。雲門香悦云々、十余字禅語にや。

董其昌⁽⁸³⁾之書。一幅。高山頂上一間屋。寒僧半間雲半間。昨夜雲染微雨去。都応不似寒僧閑。其書画錦帖に、たり。

別にびいどろの屏風。珊瑚珠(樹)の珠数なるもありとぞ。「比寺檀耶なし。又、知行なし。たゞ唐人の葬埋追福などす。凡毎年五十メめほど収納すと也」

〔床上に、其先住和尚のつづからぎざめる大黒の小木像あり。むかし唐人(窃に)袖にして帰るけるが、俄にはらいたみける。木像たたりをなすよし、爰にみえければ、其後、又、もて来て、寺にかへし納むと也〕

王維輞川⁽⁸⁴⁾画。一軸。古雅細妙いふばかりなし。筆者たれともなし。「奥書あり。其ひとをわする。いづれにあれ、古雅細妙いふ計なし。別にをらんだの国のさまかきたる一軸ありたれど、是は、近俗にしてみるにたらず。ただ異国のことなるさまをみしるのみ」日もくれか、れば、厚く拝謝して逆旅にかへりぬ。

(83) (一五五五―一六三六) 明代の書家。画家。

(84) (七〇一―七六一) 盛唐の詩人・画家。山水画を得意とする。輞川の川畔に王維の別荘があった。

**Tsukushi Diary (Volume) with annotated note
and the reproduction of the original text**

Terumi Matsubara

Masafumi Igawa

Abstract

The writer tells in the book about historic events and comments on them while visiting scenic spots and places of historic interest in Hiroshima, Yamaguchi, Fukuoka, Saga, and Nagasaki.

Only the first volume is preserved in the Seto Inland Sea Historic, Folk Museum in Kagawa Prefecture.

This is an Introduction to Volume , a reproduction of the original text with annotated notes.

高松大学紀要

第 32 号

平成11年 9月25日 印刷

平成11年 9月30日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064